▼

〝シャドーマン〟という怪人を知っているかい？

その男はどこにでも現れる。中肉中背、黒ずくめの格好、いつもペットの散歩中といった様子で駅前やガード下、町中の雑踏なんかを歩いている。

けれどそのリードの先には小型犬の形をした影が動いているだけでね、つまりはそいつは生き物じゃあないんだ。それに気付いて誰かが怪訝に思うだろう？　こんな場所で何の撮影だ、そうじゃなけりゃ大道芸なのか？　とね。

声を掛ける人もいるんだ、すると男は白い歯を見せて笑うのさ。

――――見付かっちゃった？

盤上ロック

「えっと…」

黒子テツヤは時間を確認し、馴染みのない地下道の案内表示の前に立つ。探せばそのホテルはビル名と並んでしっかりと表示され、迷うようなこともなさそうだ。地上に出れば皇居を目印にすればいい、人の流れは緩やかで、朝の通勤ラッシュをやり過ごした後の落ち着きがあった。

「……」

空は快晴、西の向こうに欠片といった雲がかかるくらいですっきりと晴れ、季節に似合わず衰えのない光が眩く白くアスファルトとガラスに弾けていた。

「痛い…」

暑いわけでもないのに灼かれてしまいそうである。それにしても早すぎた。

地上出口に出たところで思う。目的地はすぐに分かった、のんびり歩いて行ったとしても二十分とかかりそうもない距離だ。だがスポットを当てられるような人間じゃない、日射しを避けようとせかせか黒子は歩くのだろう、ものの数分足らずで着いてしまう。その建物は流石は老舗といった風格の佇まいであり、おいそれとは近寄りがたい光を放つかのようだった。招かれたのだから気後れしたって何だって行く、けれど心は落ち着けたい。時間を潰そうにもカフェラウンジのコーヒーは黒子の懐具合にはまるでそぐわないに決まっているし、誰もが忙しく、ごった返すような時間帯ではないが、路面に並ぶ店舗もよくよく見ればコンビニ以外は開店前で書店にも入れそうもなく、一日の活動前といったところだった。すごすごと引き下がり、目に付いた地下のコーヒーショップに入ることにする。掲げてある看板にはモーニングタイムのメニューが並んでいる。

朝食も摂っていなかった、馴染みのないクロワッサンを食べ、ほっと一息吐いたところで

「…この世のスマホやケータイを一斉に鳴らす方法でも考えてるん

ですか？」
生ぬるく横から声を掛けられた。
「うわ！」
心臓が跳ね上がる。
「おはようございます、黒子先生。オレが先生を見付けられるとはなあ…」
相手はにっこり、というよりもにたりとやや崩れたような笑みを浮かべた。してやったりとでも言いたげだ、まるで黒子の気持ちを読み取り、一挙一動を後ろから見守られていたような気まずい心地にもなる。
「緊急速報よりも心臓に悪いですよ、片山さん」
「それとも緊張してるんですか？」
「わざわざ招待なんてそりゃ緊張もします」
「タイトル戦でもなし、お祭りですよ」
軽く言われてもこちらは素人なのだし、そんな素人でさえ耳にしたりする大物ばかりが参加する祭りに交わるのに緊張するなど無理な話である。
「場に合わないというか心構えもなく、理由だって思い当たらないものですから…」
黒子のこの動揺ぶりを汲んで貰いたい。どっこい、そういうこともありますよね、という風に頷き、片山はカップを啜る。同情しているのか面白がっているのかその表情は掴みがたかった。
「ご迷惑だったとか？」
「まさか。光栄には思いますけど、私は指せないし、打てませんから」
あー、と相手は相槌を打つ、このアウェー感を多少なりとも理解してくれていると受け取る。
「棋士はSかMばっかりですからね。Aクラス対談とか読んだことありますか？『自分の子供は棋士にさせたくはない、苦しいばかりだから。けれど、私は生まれ変わっても棋士になりたい』…って患ってるんだから、人間味たっぷりでしょう？」
「……」彼らの名誉は。
「独特ではありますけどね。常識的な人から世間ズレしちゃって何かしらトラブル起こしてゴシップ記事になりかねない人もいますけど、下支えしてくれる人がいるのもよく知ってますから。そのせいもあってか慎重に親戚だとか、恩師とか、友人とか招待の枠はまあ挨拶状代わりの側面もあるわけですよ、大体がそんなです」
変に阿るようなのとかタレントと勘違いして来るのよりましですし、と何気に毒っぽいことも吐き出してくれる。教育現場に軽薄で配慮のないバラエティー番組が我が物顔で平穏をぶち壊しに来るようなものか。
「作家の先生も招待されてると思いますよ。他にも警察OBから弁護士や企業の重役とか、好きで棋士とも個人的に仲良くしてたりしますからね、ほら、今日のイベントにはもってこいですし」
「はあ」
より重たいのがきた。
「平気ですよ、畏まることはないですって。前夜祭も来れば良かったのに。楽しかったですよ、色んなもんが見れて」

背格好は黄瀬と同じくらい、薄い色素の髪色と目、誠実そうな見てくれでやや目は垂れている、そこが愛嬌にも見えるのだろう、異性にモテそうな片山は編集記者である。かつて近所の教室に通っていた囲碁少年だったそうだが、いまはスポーツ紙の文化部にいる。エンタメやらカルチャー記事かと思いきや専門は棋界の囲碁、特殊ともいえる業界でこれまた異色にも思えたものだ、プロを目指し、それで挫折したのかも黒子は過去を何も知らないが、担当しているのだから身に近くいたことは容易に察せられた。年が近いこともあってか彼の方は部外者に気さくに話しかけてくれている。確かクォーターでクリスチャンだ。

「色んな…」

あるだろうがとりあえず黒子にはそんなのも興じられる余裕がない。ホットコーヒーだってカップを持つ指先はひんやりしているのである。

空調の作動音が聞こえてきた。いよいよ地上でも一日の活動が始まったような合図に聞こえる。

「黒子先生が気を付けるべきは僕みたいな善良な記者じゃなくて、プライベートにずかずか踏み込んで、その棋士や周りの人の不幸やらを飯の種にするようなのです」

「そういうものですか」

寧ろ黒子は認識すらされないだろうからそこは杞憂と言えそうだが、まあ、いるだろうゴシップライターも。棋院に通い、観戦記者たちと語らっては奨励会員にも近く接する片山からすれば容認できない部分もあるだろう。

「不倫だのの不祥事な記事が得意なのもいると思うからそういうハイエナに撒き餌とかダメですよ」

「肝に銘じます」

黒子は放言を吐くし、暴言だってきっとする。だが、授業や社会の場においては考え、弁えもしているつもりだ。ネットワークが発達した時代に『誰が聞いているか分からないから』と意識過剰な自己規制やら萎縮した言論とか黒子には意味不明な部分もある。家から一歩出たら、ＳＮＳにログインしたら、誰もが国会議事堂並みの意識が必要なのかと考えてしまうのは自分がソーシャルメディアに疎いからなのか。…重たい。

「あ。でも、参加者全員に対局権があるとか聞きました」

一応ゲームソフトで練習はしたが、一度も勝てなかった。来ているのは実はそれが悔しかったからでもある。勝てないと「次！」と前のめりになる、勝利の中毒性というのはこわいものだ。

「プレスだってそうです。まあでも、大丈夫」

「しれっと言いますね」しかも無根拠に。

「あはっ。じゃ、リラックスするためにお気に入りの音楽を聴くとか」

「α波みたいな」

「ありがちですけど。オレの聞きます？　テンションを上げる最強プレイリスト」

本気かと疑ってしまうが、相手は親切にも鞄のポケットからスマートフォンを取り出して見せる。

「原稿書くときとか、取材前に聞いてるんです。棋士にも対局前に

そういうルーティン作る人いて、話聞くと面白かったりするんですよ。記事にはなりませんがね」
　イヤフォンはさておき、プレイリストは多くあり、曲名もアーティスト名も黒子が知っているくらいの認知度があるものからそうでないものまで並んでいる。何だか彼の本棚の一部を覗かせて貰っているような気分だった。
「片山さんの趣味ですか？」
「いや、バンド経験とかはないです」多いですかね？
　片山は表示を見せながら指を滑らせ、ついついっと下方に送る。
「『horse』？」
「ブリティッシュロックです。とある棋士が『馬はロックだ』なんて言いましてね、面白いなって思って」
「馬はギャロップだと思うんですけど」
「ですよね。でも、趣味っつーか、まあアスリートが試合前に集中力高めるためとかしてますけど、オレもそういう感じですから、自分でいいなと思ったものを…あ、これです」
「えっと…」
　ぱっと出たものは戸惑うばかりの楽曲リストだ。カラフルなアイコン、とりあえず黒子が好んで選ぶことのないタイトルの羅列である。
「アイドルはいいですよ、偏食はよくないな。オススメです。王道からヴァーチャルまで坂道を駆け上がっては全力で更に上がる」
「ああ…」
　イメージとして分からないではないが。

「黒子先生は頑固だからなあ。んじゃ、せめて緊張を解くお守りあげますよ」
　片山は肩を竦めてからにっと笑い、目の前に飴を詰めた小袋を置いた。何気なく理解していて下さる、流石に記者と言うべきか。
「これ、天才達の勝負飴。昨日の前夜祭でもらったんですけどね、御祈祷済みっていうから御利益あると思います」
「……」
　それはありがたい。片山はスマートフォンを仕舞うと、そんなことより、と顔を近づけてきた。
「東堂くん、調子良いですねえ。順位戦もいけそうだし、ＭＨＫ杯も勝ち進んで次は霧崎六段とですから」
　取材か。善良かつ親切だが、彼も生易しい記者ではない。
「みたいですね。音楽と言えばうちの学校も吹奏楽部が全国コンクールに出場します」
「それはすごいな」
　と、感心した風に応えはするが、話を続けようとしない。
「ＭＨＫのホールで」
　そのため日々練習している。黒子もこれがなければ練習を見に行こうかと思っていた。
「そのＭＨＫ杯。素晴らしい」
　逸れなかったか。生徒達の頑張りだとか、指導する同僚の苦労とかはいくらでも語れるのに。飴の代償は職場の話題では釣り合わない。
「東堂君と何か話したりしました？」

新人棋士の東堂要一四段は黒子の教え子である。片山は黒子が初めて受け持ったこの教え子を三度記事にしていた。若手を気に掛けているのか、それとも記者魂に熱いのかが量りかねるところだけど、学校まで突撃してくるのには驚いた、そして黒子が撃退する、突撃するをやり合った。ずけずけ踏み込むようなところに配慮がなく思えたからだったが、否定的でも好意的でもない記事は、それこそ表面的な紹介頁くらいでしかなかった。拍子抜けするくらいだった。むしろ飾り気もないぶん、分かり易くもあった。二度目のものはこれがとてもよかった。何度か担当した記事を目にしたけれど公平さを貫いているところがいい。東堂に訊いたところによればストレートで気さくなのは誰にでもそうらしい、学生時代は棋院でアルバイトしていたので雑用に借り出されて奨励会員や棋士とも馴染みがあったという。それが縁だったのか、黒子も飲みに誘われたりするようになっている（でも飲みに行ったことはない）。

東堂は、『よく分からないところがテツ先生と同じだったんで』と言っていた。複雑だ。

三年前、黒子は教育実習で帝光中に行った。教員免許を取得するためである。大学生のまだ人生の道筋すら不確かな人間に教えられることなどあるまいに、と理不尽を覚えたものだが単に行き先不鮮明さ故に焦って苛ついていたのだろうと今となると恥ずかしさがこみ上げてくるが、いい思い出になってくれるものと信じている。何か資格をと考えて選んだ教職課程だったがこの体験は黒子の進路を確定付けてくれた。

実習は教科や受け入れる学校の都合で二週間から四週間となるが、黒子の場合は三週間だった。教科は国語で、一つの単元を任された、しかも古文である。常に指導案を書き直していたと思う、我ながら文法と意味を教えるのだけで精一杯の面白みもない授業だと思ったが、担当のクラスは妙に食いついてくれた。というのも、導入部で見せた絵は囲碁を打っていたからだった。黒子が受け持ったクラスには囲碁のプロを目指す少年がいたのだ。大人しく、休みがちなその少年はクラスでもどこか浮いたところがあったようで、絵を見せたことでからかわれたりしないかと黒子が心配していたところへ片山の突撃で、…濃い三週間を過ごせた。少年は東堂といい、九歳で奨励会入りし、小さな挫折を繰り返しながらリーグ戦を勝ち抜き、プロに昇格した。黒子が彼と交わしたスクールノートの言葉は「先生ウザイです」なる抉るような一言から始まり、今ではなんとか信頼を得られている。それは東堂にも先輩に当たる某恩人のお陰だ。学校での話し合いや細かな手続きなど東堂家の家族のサポートも出来たのはアドバイスがあってこそで、彼には頭が上がらない。

「今日だって美女とのペアだし、オレだって張り切っちゃいますよ」

片山は黒子の横で機嫌がよさそうにコーヒーを啜る。プレス関係者の集合時間などは知らないが彼はこんなところでのんびりしていていいのだろうか。

「組み合わせが決まるのは当日のくじだってサイトにはありましたけど」

将棋、囲碁の棋士達でペア碁の紅白戦を行うそうだ。東堂の名は

参加予定者の中に入っている、アマも女流も加わるらしい。黒子はとりあえず『ペア碁って何？』から検索した素人なので片山の言葉に対し、反論も異論も言えないのだが相手はまるで己が美女をペアの相棒としてエスコートするかのように遠くを見遣り、「いやいや。投票があるから！　棋力差を考えなきゃなとこもありますけど、オールスターみたいなもんですからね」

力説してくる。

「…あ、でも代理戦争じゃ、楽しむ余裕もないかな…」

よく分からないことを片山は一人言ち、うんうんと頷いている。

『代理戦争』？

「実は私は今日、東堂君じゃなくて、敵の方に呼ばれたというか…招待もそちらなので……」

肩身は狭いような狭くないような変な感じだ。いままで彼は式典にも呼んだりしたことはなかった、お祭りとはいえ不思議に思ってもいたのである。それに彼には勝てたことのない相手がいる、手の届かない高みにあり、「黒子に負けなければぺしゃんこになっていたな」と笑った。ぞっとした。棋界の一部を垣間見た気がして電気が走ったようにもなった。

「え？」

相手はきょとんと黒子を見る。

「赤組？　えーと、出場者は確か将棋の赤司六段と…女流名人、吉村女流二段…」

目が『黒子さん、まさかあなたあの書けば飛ぶように扇子やら色紙が売れる人気女流とも親交があるなんて、一体どんな手を使ったんですかコノヤロウ』と雄弁に物語っていた。

「あ。女流の方ではなく赤司六段です」

「赤司六段？」

言って気付いたようだ。

「高校卒業してから奨励会入りしてプロになった人ですよね？　確か、東堂君と同じ中学で…え、先生、あの赤司六段と知り合いなんですか？」

弁護士に至るまでのコースが一つだけではないように、棋士になるまで一足飛びになる人や紆余曲折を経てなる人もいる。赤司は平たく言えば周囲が思い描いた予想を突き抜け、思いがけないゴールへ飛び込んだようなものだった。高三の冬に彼が放った言葉は落雷に近い。

「中学で」

学校に取材に赴くのに不勉強では話にならないだろう、同じ中学出身の囲碁と将棋の棋士についてはきちんとお浚いしているようだ。

「部活のチームメイトだったんです」

「あれ？」

片山はいまさら見落としに気付いたみたいに言う。

高校で分かれて宿敵となったのに、大学を卒業しても縁は切れず、現在に至る。

赤司征十郎がバスケの次に選んだステージは将棋の世界。

「先生って…思いの外、人脈広いんですね」そうでもない。

片山は、呆けたような顔になる。本当に偶然なんですけど、と続

けたが『教諭』なる珍獣にでもなった気分になった。
「それより片山さん、〝代理戦争〟ってどういうことですか？」
珍獣は今日の場に似つかわしくないような言葉について説明を求める。

東堂要一は時間を確認し、ホテルの入り口に向かう。
黒子テツヤ先生は要一の恩師である。何かの師匠でもないし、詰め碁を教えてくれたとかではないのだけれど、要一は助けられたと思う、思えば変な先生だった。まあ、教育実習だからかなり前の学校の先輩で、先生未満なのだからして、話しやすかったし、兄貴分という目線で誰もが見ていたから立ち位置も要一とて先生というより近所の塾の講師みたいにしか捉えていなかったのだが。
「……」
空は晴れている、強力な晴れ男のお陰だろうことが窓から差し込む光の白さで分かる。囲碁の大御所に二人の雨男がいて、タイトル戦全戦を雨や嵐にしたことは棋院の伝説であり、市ヶ谷ではこっそりてるてる坊主が作られたのだから、拝みたい。要一は晴れている方が調子がいい。
「平気かなあ」
まだ一時間以上あるけど、招待されたテツ先生が心配だ。九段方向だとか日本橋の方だとかうっかり違うところを歩いていそうで。
――君に『郎』がつくことで運気が上がり、才能を恣に負け知らず、恐れ知らずのまま一気に頂点まで進められたかも知れません。が、しかし、なかったことで君は歯を食いしばるような努力を強いられることになった。これはとても重要なこととボクは思いますよ。
三年前のことだ。勝ちよりも負けが多くて、クラスは上がったのに要一の毎日はこれといった不満がないにも関わらず、ちっとも冴えていなかった。
理解されているんだかいないだかも分からない学校と両親と奨励会との隔たりは昇級するほどに大きくなって、自分はどんどんヒネていっていた。負けが越してクラスが下がると祖父は己の名付けが悪かったと繰り返した、勝ったり負けたりして、それは死ぬほどの事じゃないと頭では分かっているのにそれでもその言葉を重ねられるほどつらく、胸の辺りからねじ切られるような痛みを覚えたりもした。元に戻らないぶん、ちょっとした弾みで死ねるほどで、実際、気持ちの整理がぐちゃぐちゃで、当時はパンパンになっていた。そんな時にふいにやって来た先生は、記者が唐突に取材にやってきて説明の言葉さえ出てこずむっつり黙り込む要一と変な方向に拗れていく学校と家の間でぐちゃぐちゃになった糸を解いてくれた。
――ボクの唯一と言ってもいい自慢です。
と、一枚の写真を見て言った。始まりはそんな言葉だった。
熱血漲るといった態度でもなく、ましてや唾を飛ばすような口ぶりでもなく、一歩くらい離れた場所に立って、影の薄いその先生は、居てくれた。
――何故なら、諦めないことについては天才も凡才もお構いなしだからです。

そんなの分かってる、と要一は言った、かの先生は臆することなく『ボクなんて知ってます』と言い返してきた。
――――才能に愛され、呼吸するみたいに勝ち続ける『郎』付きの人物を負かしてやりましたから。
どういう次元の話か知らないが何を抜かしているんだ、と上からまじまじと見詰めてみたが、先生は、そこは『兄貴』ではなく『先生』で、要一は黙ってしまった。納得したわけではない、よく分からないけど、それから黒星は溜まらなくなって、現在に至る。
変な先生なのだ、空気に溶け込んで見失ってしまうくらいの存在感なのに。
「色々と信じられないし」
エントランスを見回してから呟く、ダメだ、あちこちにオーラ強めの人が歩いていたのでは見付かりそうもない。今日のフェスには現役だけではなく引退されたお歴々など多くの人が集まるという、要一が話でしか知り得なかった大先生が実際に目の前になんてこともあるかも知れず、テツ先生に気を配れる自信がない。
「あ…」
スマートフォンを手にしたスーツ姿の男性が颯爽とした足取りでエレベーターホールへと向かってゆく。
白い光に縁取られた若い棋士は要一が学校の校長室でぼんやりと見上げた集合写真に写っていた人物だった。もうとっくに卒業しているのにバスケ部では神の如く崇拝されていて、写真ですら漂ういかにもな雰囲気と怖そうな目つきといい異様に思えていたのに、強い憧れも抱いた。…というか、彼が将棋の奨励会入りしたと何かで知ってそれで勝手に闘争心を燃やしたのである。先を歩いているその人は明るい方で、要一が後を追う。テツヤ先生はその後ろ、ボクは影ですからねと自慢げに言っていたけれど、地味さを売りにするというのも薄気味悪かった（悪いけど）。ついでにもっと言えば、そんな先生が要一のクラスの副担になって自分を構うようになったのには引けた（なんてことは言えてない、流石に）。
「後ろって、迷子になられちゃうとなあ…」
エレベーターのある廊下やラウンジを見てみる。ホテルだと思う、そりゃそうだ。いつもの建物なら慣れているのだけど、こんな場所ではやっぱり要一も緊張する。先輩棋士や師匠のパーティーでも言われるがまま付いて歩いたり手伝ったりしていただけなので勝手がよく分からない。
「師匠の部屋は…」
前日に前夜祭があったのでイベントに参加する何人かの棋士達はこのホテルに宿泊している、要一の師匠も家族で泊まっていた。タイトル戦じゃないんだよなあ、大会の審判とかでもしないし、兄弟子はどこだろう、棋院の人に挨拶もしないと。
「あ」
案内板があるので見れば宴会場が四箇所あって、首を巡らせると看板みたいになった案内に一番広いところは要一も参加する今日の催し、あとの二つは歯科医学会と学校の同窓会となっていた。すぐ横にはブライダルフェアの案内のポスターが貼ってある。
「……」
どの部屋も廊下もなんというかドアが似ているような気がする